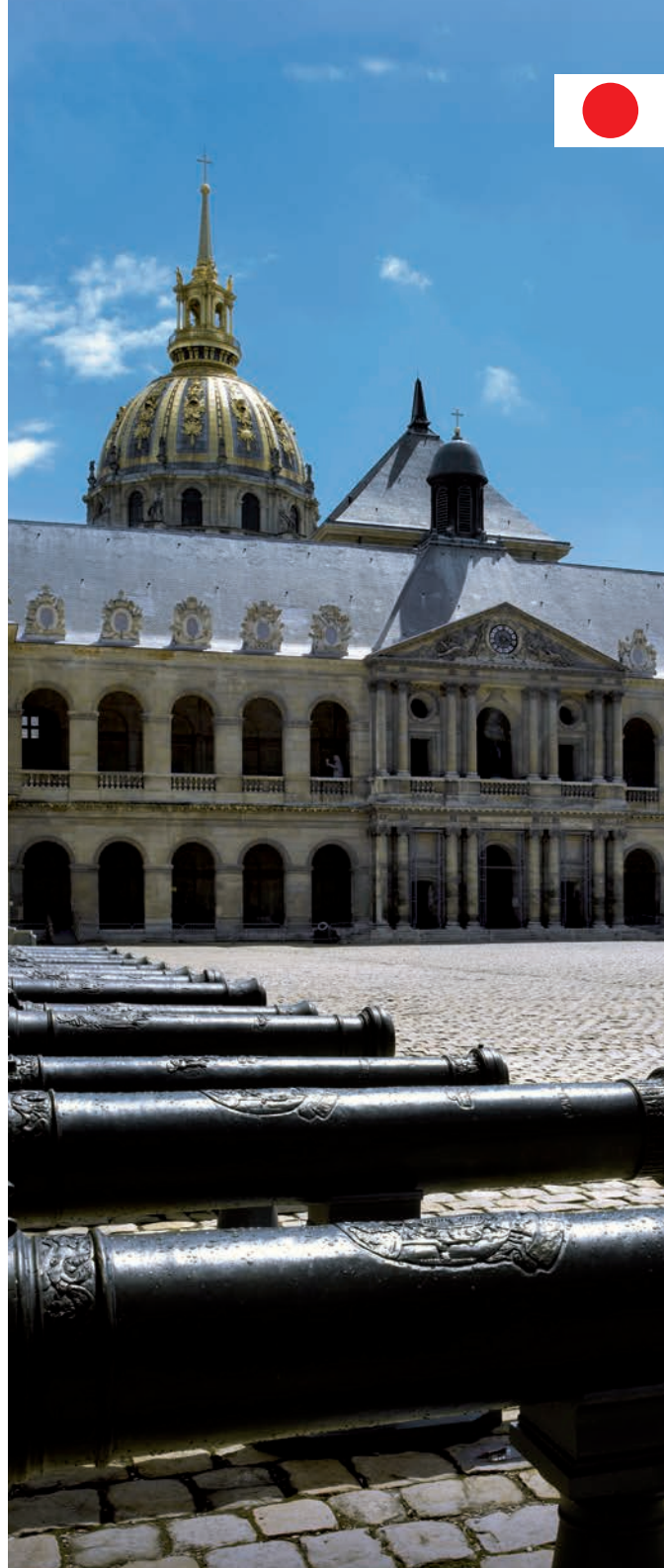
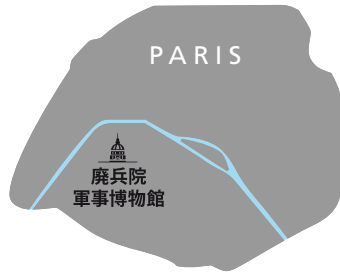




軍事博物館 廃兵院



アクセス

アンバリード広場あるいはヴォーバン広場から
地下鉄：ラ・ツールモープール、アンバリード、バレンヌ
RER：アンバリード線 C
バス：28, 63, 69, 80, 82, 83, 87, 92, 93, Balabus
駐車場、タクシー、地下鉄駅近い

一枚の切符だけで軍事博物館、
ドーム、ナポレオンの墓、
立体模型博物館、
解放勲章博物館

時間表

- ・ 毎日開館
4月1日から9月30日まで10時から18時まで
10月1日から3月31日まで10時から17時まで
会計終了閉館30分前。
- ・ 4月から9月まで火曜日夜21時まで。
- ・ 月の第一月曜閉館（10月から6月）、
5月1日、11月1日、12月25日、1月1日閉館。
シャルル・ドゴール歴史館は毎月曜日閉館。

ご案内

団体観光、前売り券購入 + 33 (0)1 44 42 43 87
成人団体ガイド付き見学 + 33 (0)1 44 42 37 72
学校団体、青年団体、家族 + 33 (0)1 44 42 51 73
本屋、ブティック + 33 (0)1 44 42 54 43
カフェテリア + 33 (0)1 44 42 50 71
軍事博物館友愛協会 + 33 (0)1 44 42 37 75
部屋レンタル（個人受付）+ 33 (0)1 44 42 40 69 / 33 75



軍事博物館

廃兵院

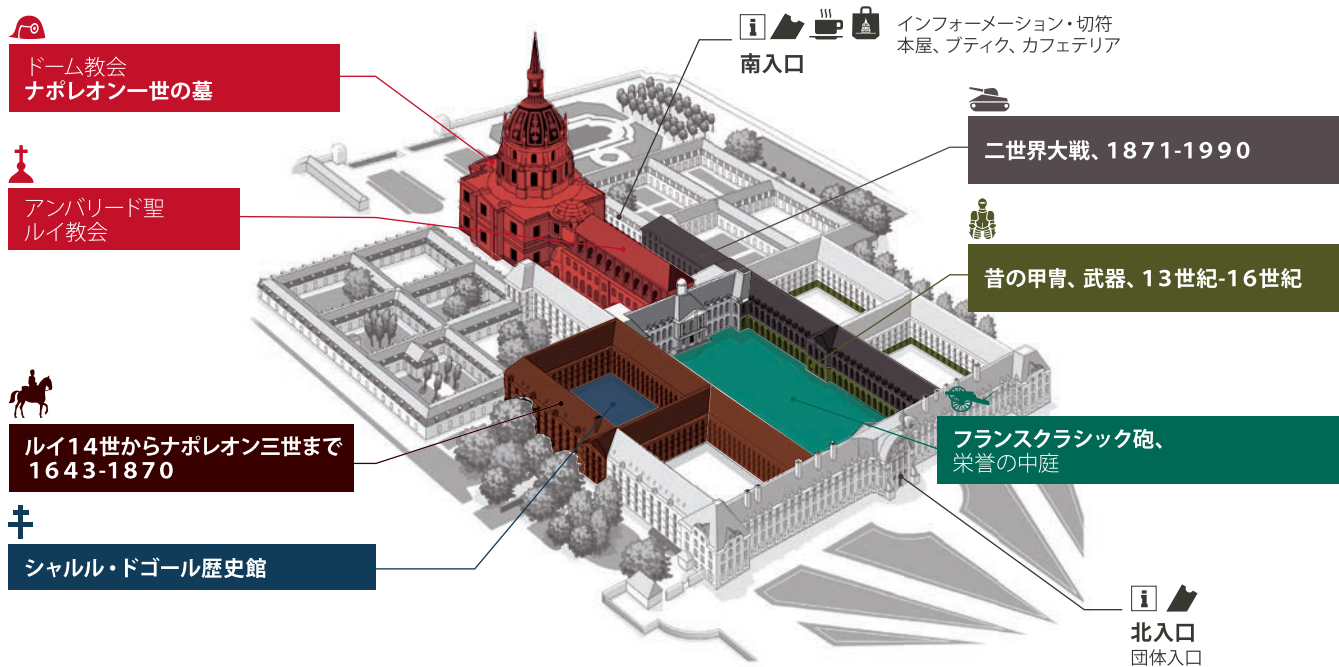
129, rue de Grenelle 75007 PARIS

Tél. : + 33 (0)8 10 11 33 99

+ 33 (0)1 44 42 38 77

Fax : + 33 (0)1 44 42 37 64

www.invalides.org



ドーム教会
ナポレオン一世の墓

アンバリード聖
ルイ教会

ルイ14世からナポレオン三世まで
1643-1870

シャルル・ドゴール歴史館

南入口
インフォメーション・切符
本屋、ブティック、カフェテリア

第二次世界大戦、1871-1990

昔の甲冑、武器、13世紀-16世紀

フランスクラシック砲、
栄誉の中庭

北入口
団体入口

軍事博物館

博物館であると同時に記念建造物でもあるこの軍事博物館では、見学者は豊富、多様で教養にもなるコースをたどることができ、好みに従ってコースを取捨選択できます。

・アートと歴史の最高級コレクション

博物館には中世から20世紀までのフランスの軍事史に関する作品と品物が保存され展示されています。例えば、昔の甲冑、軍服、装備品、サーベル、剣、武器・武具（刀剣類、火器など）、豪華武器、砲兵武具、紋章、装飾品、歴史的肖像、楽器、絵画、写真、彫刻、歴史的英雄の偉業など。

・博物館-記念建造物

軍事記念建造物、国立廃兵院（アンバリード）の中にある軍事博物館はその場所柄、例外的な性格もっています。博物館見学は実際アンバリード見学と不可分となっている。

たどるコースは必然的にアンバリードの中庭と回廊に行き着き、回ることとなります。

そのコースはドーム教会にも通じており、そこには他の墓にまじって重要なナポレオン一世の墓もあります。

廃兵院

・建物

17世紀まで、傷病兵を収容する施設は何もなかった。1670年、ルイ14世は戦争で戦った老兵を迎えるため廃兵院創設を決定した。工事の監督は建築家リベレ・プリュアンに任せられ、プリュアンは壮大で簡素、優雅な古典様式の傑作を建立する。

・傷痍軍人の《都市》

最初の居住者は1674年に入所する。救済院であると同時に兵舎、修道院、病院、工場でもあるこの施設は、軍隊的であると同時に宗教的なシステムによって規制されたまさに一つの都市であった。17世紀末には、収容者は4000人にまで達する。彼らは将校によって統率され、中隊に分割された。最も健康な者が、特にバステュークにおいて警備任務に就き、他の者は靴、タピスリー、彩色挿絵の製造工房で働いた。執政政府時代および帝政において、ナポレオン・ボナパルトは制度再編を行い、聖ルイ教会を国立軍事パントンに変え始める。この変化はドームの下にナポレオンの墓を建造することで1840年から顕著となる。現在、歴史的記念建造物である国立廃兵院は国の記憶の中心地である。およそ50の組織がそこで活動している。その中で、軍事病院である国立廃兵院は南側に位置し、当施設の最重要使命を担い、他方、北側では、国王の老兵たちに代わって軍事博物館のコレクションが置かれている。

アンバリードの聖ルイ教会

1676年、軍務大臣ルーヴォワは若い建築家ジュール・アルドゥアン・マンサールに、リベレ・ブリュアンが成し遂げられなかった教会の建築を任せた。

ジュール・アルドゥアン・マンサールは、王の教会《アンバリードのドーム》と兵士の教会とを調和と一貫性をもって結びつける建物を考へ着いた。

こうして、王と兵士は、礼儀上の要請からそれぞれ異なった入口を通過して礼拝場に入場しながらも、同時にミサを聞くことができる。この区分けは19世紀に、ナポレオンの墓の建設と2カ所の異なった祭壇の建設および2教会間の大ステンドグラスの建設によって強化される。

兵士の教会

この教会は栄誉の中庭に面し、古典建築の見事な見本である。パイプオルガンが1679年から1687年の間に、国王建造物専任指物師のジェルマン・ピロンによって作られた。

教会の軒蛇腹は敵から奪った100ほどの戦利品で飾られ、1805年から20世紀までのフランス軍の歴史を点描している。昔からの伝統の証である、これら戦利品は大革命までパリのノートルダム大寺院の丸天井に掛けられていた。破壊を免れたものは1793年からアンバリードに移された。アンバリードはその時フランスの紋章と戦利品を守る使命を受け取ったのである。そうした戦利品の内約1500が、敵の手に渡らないように、1814年にアンバリードの中庭で長官によって焼かれた。

聖ルイと聖なる三位一体に捧げられたこの教会は、管理上は1905年の軍事博物館創設以来、軍事博物館に所属している。この教会は今日、フランス軍の大寺院なのである。

ドーム教会

この王の礼拝堂は1677年から1706年の間に建設された。当時実現された内部装飾は、ルイ14世、君主制そしてその軍隊の栄光を称揚している。

大革命時には軍神寺院であったこの教会は、ナポレオンの指示によってチュレンヌ元帥(1800)とヴォーバン元帥(1802)の墓が設置され、軍事パンテオンとなった。今日にいたるまで、こういう次第で教会では、ナポレオン一世の墓の周りに彼の息子、ローマ王の墓、兄弟ジョゼフとジェロームの墓、ベルラン將軍とデュロック將軍の墓、そしてまた20世紀前半の二人の著名な元帥、フォッシュとリョーテの墓がある。

・ **ナポレオン一世の墓の穴** 1840年に、ルイ・フィリップはナポレオンの灰をセント・ヘレナ島からパリに持ち帰り、アンバリード・ドームの下に墓を建設するよう命じる。建築家ヴィスコンチに任せられ、墓は1861年に完成する。石棺を囲む、プラディエに彫られた12個の《勝利》はナポレオンの戦闘を物語っている。多色大理石の床には有名な8つの勝利が刻まれている。ナポレオンの民法上の業績がシマルルに彫られた10の浅浮き彫りで表現されており、それらが地下納骨堂の壁を飾っている(国家秩序回復、中央集権化、國務院、民法、政教条約、皇帝大学、会計検査院、商法、グラン・トゥラヴォー、レジオン・ドヌール勲章)。安置室の中には、戴冠式衣装をつけたナポレオン像の下に、息子のエーグロンが眠っている。


> 聖ルイ教会のパイプオルガン
ジェルマン・ピロン(17世紀)、
国王建造物専任指物師

© ECPAD

< ナポレオン一世の墓

© ECPAD



 17世紀から19世紀のフランスの大砲、アンバリードの栄誉の中庭

アンバリードの栄誉の中庭には銅製のフランスクラシック砲が60門、珍しく一揃い展示されていて、軍事博物館の砲兵コレクションを成している。

これらは一巡りでフランスにおける200年の大砲の歴史を跡付け、見学者は大砲の製造、その役割、ならびに偉大なるフランス砲兵の英雄的行為を知るよう促される。



フランスクラシック砲

コース初めに在るのは、1666年にケラー兄弟によって完成されたフランスクラシック砲である。ルイ14世の戦争の時、要塞包囲に参加し、ヴォーバンの成功を可能にしたのはこれらの大口徑大砲なのである。フランスクラシック砲は大成功をおさめ、何度が変化した。

次に在るのは、1732年の30門に及ぶいわゆる制式大砲である。これら壮大な大砲はすべて紋章と神話的装飾で規則的に飾られている。

グリボーヴァルとヴァレのシステム

1764年から、グリボーヴァル・システム — 制作者名 — の大砲がフランスクラシック砲に取って代わる。より扱いやすくより合理的なこの新しい大砲は、大革命時と帝政時の戦争で大活躍する。練達の砲兵、ナポレオン・ボナパルトはこれを見事に活用することとなり、特に2度のイタリア戦役、そしてフリードランドとワグラムの戦いでそうであった。

1825年から、ヴァレのシステムがグリボーヴァル・システムを受け継ぐ。これら2つのシステムの大砲はフランスクラシック砲と比べると、より機能的で飾りが少ない。

迫撃砲と曲射砲

展示されている8門の迫撃砲は大革命時と帝政時の戦争で包囲用に作られた。中庭の四隅に2門の大きな曲射砲が展示されているが、これは1810年のフランス軍によるカディクス包囲の時、この町を砲撃するために考え出された。射程距離が6キロメートル近くで、当時としては前例のないものであった。



< フランスクラシック砲の紹介、アンバリードの栄誉の中庭

© 軍事博物館・パリ / トニー・クレック

> アキレス広場の12ライフルの大砲

マリツ鑄造、青銅、1746年

© パリ / 軍事博物館, Dist. RMN / エミリー・カンピエ



昔の甲冑と武器、13世紀から17世紀

昔の武具コレクションの豊富さによって、この軍事博物館は世界の3大軍事博物館の一つとなっている。

王冠のコレクションから放射状にのびている武器と甲冑の展示は時代順かつテーマ順になっている — 聖ルイからルイ13世まで、中世の騎士から常備軍まで一。

・王室 — 王冠コレクション

このかつての食堂には、国王関係のコレクションおよびフランスと外国の王族武具に由来する見事な作品が集められている。壁の装飾は、ルイ14世が陣頭に立つオランダ戦役の場面を想起させる戦闘から成っている。17世紀にジョゼフ・パロセルによって描かれたもので、2005年に修復された。



時代順コース

・中世の部屋：封建時代軍隊から王の軍隊まで

展示されているのは、13世紀から15世紀までの甲冑や武器で、特に大砲や見事な中世の剣コレクションである。

・ルイ13世の部屋：王の軍隊の発展

この部屋は、イタリア戦役、ハプスブルグ帝国戦、16世紀の宗教戦争ならびに17世紀初頭の諸戦争に当てられている。ここで見られるのは、フランス歴史における偉大な英雄たち、フランソワ一世からルイ13世までに係わる武器、甲冑である。トルコの部屋では同時代のオスマン王朝の武具が見られる。

武器類のテーマ順コレクション

この驚くべき独創的なコレクションは過去の武器庫の秩序と雰囲気を感じさせる。2500の武器が分類されている。

騎士のレジャー：狩猟、騎馬槍試合、馬上槍試合

(中世末 — 17世紀半ば)

貴族社会が偏愛するこの活動は、狩猟装備や特殊な防御用甲冑、武器によって紹介されている。

テーマ順の部屋：世界の甲冑、武具

・東洋の部屋 (15世紀 — 20世紀初頭)

甲冑、刀剣、火器が、中東からアジアの果てまでの軍事文化の遺産を物語っていて、オスマン王朝、ペルシャ、モンゴル、中国、日本、インドネシアの文明が見られる。

・銃の部屋 (17世紀初期)

70の武器がヨーロッパで働いた巨匠たちに依る民間用銃の見事なコレクションを構成している。

・ヨーロッパの部屋

(16世紀と17世紀)

イタリア、ドイツ、フランスの3セクションによって、最も有名なヨーロッパの武器製造の巨匠たちの驚くべき武器類が紹介されている。

> フランソワ一世の

甲冑と馬鎧

ジェルク・ソイセンホファー (武具師)

デーゲン・ビルガー (彫刻師)

インスブルック、1539-1540

© 軍事博物館・パリ, Dist RMN / バスカル・セグレットゥ

< いわゆる《キマイラ風》

面頬なし兜

オランダ製、v.1550-1560

© 軍事博物館・パリ, Dist RMN / バスカル・セグレットゥ





ルイ14世からナポレオン3世まで、1643-1870

この部門のコレクションは、その多様性と数によって世界でも稀なコレクションとなっている。例えば、一兵卒の制服、豪華品、フランスと外国の多くの軍隊装備、武器、馬具、勳章類、紋章、歴史的肖像、楽器、大砲模型、そしてナポレオン・ボナパルトや彼の元帥たちのような著名人物の戦果。またそこには、同時代の叙事絵画の見事なコレクションが輝いている。

時代的連続性、テーマ順の空間によって、フランスの軍事、政治、社会、産業の歴史が見渡せる。大きな戦いを追体験し、兵士の生活を発見し、テクノロジーと戦術の進化を追い、その時代を画した諸人物に出会ってください。



旧王政：

ロクロワの戦いから大革命まで

ルイ14世の治世はフランス軍事史において決定的な段階である。その治世は王の征服政策に強く動機付けられた常備軍の編制によって特色づけられる。コレクションは軍隊における進化を証言し、諸王の軍事的環境および征服のための大きな戦闘を想起させている。

大革命から第一次王政復古まで

ナポレオン・ボナパルト、彼の軍隊、元帥たちに係わるコレクションは特に素晴らしい。
大革命の苦悩を喚起した後、コースが見せるのは帝政の諸戦争であり—ドイツ、プロイセン、オーストリア、スペイン、ロシア、フランス—、そしてそこで際立ってきた武器と軍隊の歴史（歩兵隊、騎兵隊、機甲連隊、カービン銃兵など）が紹介されている。テーマ順空間では、戴冠式、戦場調度品のような皇帝叙事詩の特殊な側面が見られる。

百日天下（1815年）から

1870年の普仏戦争まで

19世紀に受け継がれた軍隊は、国内の政治的既知事項ならびに対外政策方針に応じて武器類を適合させ改革しようとした。戦略の次元では、この時期はヨーロッパでは、国家間協調 — スペイン(1823)、イタリア(1859) など — と普仏戦争1870-71によって、フランスにトップの座をもたらさんとする遠征で特色づけられる。

チュレンヌとヴォーバンの部屋、

テーマ順の2つの空間

1階には、アンバリアードのかつての2つの食堂が在る。チュレンヌの部屋はテーブルの並びによって空間の最初の配置 — 入居者の食事を迎える配置 — が想起されるが、見学者には文章と図形による資料が示され、他方でその場所の発見の鍵も与えられる。ヴォーバンの部屋では、執政政府時代から第二帝政までの13人の騎手の行列が示されているが、これらの騎手は一部は画家、エルネスト・メソニエとエドゥアール・ドゥタイユのアトリエに由来し、軍事博物館の歴史とその前身である、この画家たちが関係していた軍事歴史博物館の歴史に敬意を表している。

これらの部屋はフリケ・ドゥ・ヴォーローズによる壁画で飾られている。1677年-1678年に描かれ、2009年に修復されたそれらの絵画は、フランドル戦争(1667-1668)の主要なエピソードを描いている。

< 近衛隊儀仗兵の

ドルマン、毛皮付き軍服とジャコ、
v.1813-1814

© 保証：軍事博物館・パリ、Dist RMN / バスカル・セグレットウ

> ウージェーヌ・ボーアルネーに

ミラノ市から授与されたサーベル

© 保証：軍事博物館・パリ、Dist RMN / トニー・ケック



2つの世界大戦、1871-1990

これらの部屋は1871年から1990年までのフランスの軍事史を跡付けており、もっと一般的には20世紀の2度の大きな戦いの軍事史を語っている。この紹介は、次のようなコレクションの多様性を証左とする数多くの物品に基づいている。その或るものが有名な将軍（フォシュ、ジョフル、ドゥ・ラトゥール、レクレルクなど）に属していた、フランスや外国の制服、旧植民地からもたらされたもの、歴史的な模型、装備（刀剣、拳銃、鉄砲、機関銃など）、兵士の日常生活品、名誉な品（元帥杖、名誉の剣）。紋章、絵画、個人的な書類（手紙、はがきなど）、ならびにドキュメント映画、写真、地図、立体模型によって豊かな紹介となり、ダイナミックで教育的なこのコースとなっている。

・**アルザス・ロレーヌの部屋**、1871年の敗北の後、軍隊は再編制され、兵役が徐々に全員に義務化され、何度かの危機にもかかわらず軍隊と国との間に緊密な関係が結ばれた。



第一次世界大戦 1914-1918

・**ジョフルの部屋**、コースで見て行くのは、アフリカとインドシナにおけるフランスの植民地拡張とアフリカ軍隊と植民地軍隊の重要な役割である。ヨーロッパでは、2つの同盟システムが対立していた。1914年8月、サラエボのテロで戦争が勃発したが、従軍した人々は皆、すぐに終わると思っていた。

・**兵士の部屋**、1915-1917。戦争は続き、軍隊は塹壕に身を沈める。前線を突破し、勝利を得る試みは失敗する。その結果の大殺戮は1917年に軍隊内部に自信喪失を引き起こす。同盟国は前線すべてで勝利を勝ち取るには、テクノロジー的要因と精神的要因を結合する必要を感じ始める。

・**フォシュの部屋**、1918年は、ドイツの攻撃の失敗と11月11日の休戦までの同盟軍の最終攻撃を展示している。痛ましい勝利の後、両大戦の間、フランスは世界における自身の影響力と植民地支配を確実にする。しかし、第二次世界大戦前夜、フランスはマジノ線から撤退し、軍隊近代化が遅れる。

第二次世界大戦 1939-1945

・**レクレルクの部屋**、1939-1942、《暗い年月》：1940年の敗北、英国での戦い、フランス一部占領、ヴィシー政府、ロシアと北アフリカでのドイツ軍の勝利、ドゴール将軍を中心とする自由フランス軍の参戦開始。

・1942-1944年**6月の部屋**、《灰色の年月》に同盟軍の最初の勝利は見え始め、同盟軍はあらゆる前線で主導権をにぎり、ドイツ軍によって益々残忍に抑圧されていたフランスのレジスタンス運動を統合強化し、そして北アフリカでフランス軍を同盟軍を味方に再生させた。

・**ラトゥールの部屋**、1944-1945、《輝く年月》では、ノルマンディとプロヴァンス地方での同盟軍上陸が見られ、次にフランス領土の開放、同盟軍のベルリンへの進軍、強制収容所と殲滅キャンプの発見、太平洋戦争終結が見られる。

・**ベルリンと冷たい戦争**、ドイツ降伏の後、冷たい戦争が続き、1989年の壁崩壊までかつての首都の分割が続く。

< 上陸衣装の

Giの制服

《第一波》襲撃用胴着を着て、

©パリ - 軍事博物館, Dist. RMN / バスカル・セグレット

> マルヌ県のタクシー

©パリ - 軍事博物館, Dist. RMN / バスカル・セグレット



キ シャルル・ドゴール 歴史的イベント

この視聴覚室はシャルル・ドゴールの歩みを追ひ、彼が足跡を残した20世紀の歴史の中に見学者を導きます。この部屋には何もありませんが、音と画像のみを鮮明に出します。ニュース、ポスター、写真など静止画像、動画に加え、歴史家によるインタビュー映像、対話型書物、ダイナミックな壁、地図、年代記ショー、インタラクティブな地球全図などがあります。見学者は自分一人で見学してゆきます。自動赤外線装置を携え、見学者は見知った自分自身のコースを選び、音と映像による400の資料の中を自分で進路を探り、およそ20時間の説明をオーディオヘッドホーンで聴くことができます。



同心円的な3つのゾーン、 理解の3つのアプローチ

・マルチスクリーンの部屋

Historialの中にあるこの部屋では、感動的で中身の濃い25分の伝記映画でコースが始まります。一連の絵画、本がマルチスクリーンに固有な技術で示され、コースの重要な年代的目安となります。


・リング：遺産の人物たちと《世紀の歩み》

マルチスクリーンの部屋の周りで、円形のガラスリングの上に、ベル・エポックからポップ年代までの、チャーリー・チャプリンからローリング・ストーンまでの、そして塹壕戦争からベトナム戦争までの《世紀の歩み》が映写されます。この映像の壁の中に、3つの《視聴覚ドア》があり、3つの常設展示場への入口として使えます。このコースと人物シャルル・ドゴールとは従って20世紀の力強い時代とアイコンに向き合っている。

・常設展示

3つの《ドア》を通して3つの常設展示場に行くことができ、これらは例えば6月18日の男、解放者、大統領 — 第五共和制創設者 — というドゴール將軍の遺産的な3つの姿の周りに建設された。《砂漠横断》を思わせる通路は、2つの最後の部屋を結んでいて、その部屋で見学者は、情報に富み、多様なインタラクティブな機器を通して、手探りで、知識を深め、歴史を解読できます。

 見学を行う時、ヘッドホーンが必ず必要です。

 インタラクティブな機器を使いこなすためには、一般的な使用方法が用意されています。

 目の不自由な方は聴取機器を利用できます。

シャルル・ドゴール協会のパートナー



> 《Sas》 68年5月

© シャルル・ドゴール協会 - エルヴ・アバディ

< マルチスクリーンの
部屋

© モアッティとリヴィエール

